

2020年10月25日(日)礼拝説教要約

教会修養会 第3回「主イエスの生と死」

(Ⅰ ペトロ3章)

今日は、教会修養会の3日目ということで、使徒信条の3回目として礼拝を捧げます。

使徒信条の「主は聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、死んで葬られ、陰府(よみ)に降り」という信仰告白を取り上げ、ここに込められている信仰に学びたいと思います。

まず、最初に「聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ」と言う告白を取り上げます。これは信じることの難しい告白ですが、聖書の信仰に基づきます。

ルカ福音書1章とマタイ福音書1章では、それぞれマリアと婚約者ヨセフに対して天使が「マリアが聖霊によって男の子を身ごもった」ことを告げます。

福音書は、その子であるイエス様が後に奇跡を起こし、多くの人を助け、また、神の真理を教え、さらに、十字架と復活の出来事によって救い主であり、神の子・神であることを証言します。

このイエス様こそ神の子・神であることを「聖霊によりて宿り」と告白し、真の人であることを「マリアより生まれ」と告白し、イエス様が真の人であり、かつ、真の神であるという信仰が告白されているのです。

しかも、ここには、聖霊に宿ったことを受け入れたマリアとヨセフの信仰が示されています。その意味で、この信仰告白は豊かな内容を持っているのです。

次に「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府(よみ)に降り」という告白を見ていきましょう。

「ポンテオ・ピラト」とはイエス様に対して死刑判決を下したローマ帝国のユダヤ総督です。「ポンテオ・ピラトのもとに」という言葉は、十字架の出来事が歴史的に確かな出来事であったことを示すと共に、イエス様を苦しめ十字架につけた罪人の一人として、つまり、私達罪人の代表として名前が記されていると言えます。ピラトは、私である。この私が主を苦しめ十字架につけたと告白しているのです。

しかし、イエス様は十字架に架かることによって私たちの罪をお赦しになりました。罪人ピラトもまた十字架によってその罪が赦されたのです。ピラトとは、その罪が赦された私達人類を代表している。そのことも告白されているのです。

その後、「死んで葬られ」と告白します。これは確かにイエス様が死んで葬られたことを告白し、そのことによって私達の罪が本当に赦されたことを告白し、すべての人に訪れる死と葬りに対して慰めと希望を告白しているのです。

最後の「陰府(よみ)に降り」は何を信仰告白しているのでしょうか。

「陰府」とは死者が赴く死後の世界です。なぜ、陰府に降ったのでしょうか。聖書(1ペトロの手紙3章)は、イエス様は死んで葬られた後、死者に福音を宣べ伝えたと証言しています。

生前、イエス様のことを知らず、罪を犯したまま陰府に降った死者が大勢いる。イエス様は、その死者たちに福音を宣べ伝え、救いをもたらされたのでした。イエス様は一人一人をどこまでも追いかけ、救い出そうとされた。

それほどまでにイエス様の愛、神様の愛は深いことを教えています。イエス様のことを知らずに死んでいった私達の家族もまた、イエス様によって救われていることを知るので。私達は、この使徒信条の信仰を共にして参りたいと思います。

2020年10月25日(日)礼拝説教抄(説教本文から)

「そして、もう一つ、使徒信条に『ポンテオ・ピラト』という人物の名前を入れた理由があります。それは、ピラト言う歴史上の人物を通して、人間の具体的な罪を示すためです。

この後、『ポンテオ・ピラトのもとに苦しみ、十字架につけられ』という告白文が続きます。確かにポンテオ・ピラトが、最終的にイエス様に対して死刑判決を下し、イエス様は、鞭打たれ、血を流し、手と足にくぎを打たれて十字架につけられました。イエス様は、朝の9時に十字架につけられ、午後の3時頃に息を引き取られたと聖書には書かれています。この6時間の間、イエス様は激しい痛みに耐えながら最後は息を引き取られたのです。

そのようにイエス様に苦しみを与え、イエス様を十字架につけ、その命を奪ったのは、ポンテオ・ピラトである。ピラトはイエス様に罪を見出さなかったのですが、死刑に反対することができなかった。真実と正義を貫けなかった。ピラトは、自分の弱さと自己保身のために止む無く、イエス様の死刑を認めたのです。そのことが『ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられた』という信仰告白が告げていることだと言っているでしょう。

しかし、十字架につけたのはポンテオ・ピラトだけであったのかというと、そうではありません。最初にイエス様を十字架につけることを計画したのは、ユダヤの宗教指導者達、ファリサイ派の人々、律法学者たちでした。

なぜ、彼らはイエス様を十字架につけることを考えたのか。それは、イエス様が奇跡を行い、神の教えを語り、多くの群衆がイエス様の周りに集まり、イエス様を救い主だと

信じる者達が出てきた。そのような動きを見た彼らは、イエス様を妬み、イエス様に嫉妬し、このままでは自分たちの地位や立場が危ういと思ってイエス様を殺そうとしたのでした。

それだけではありません。ユダヤの指導者たちに導かれ、煽られ、扇動された群衆は『イエスを殺せ！ イエスを殺せ！』とピラトに向かって大合唱した。この群衆たちもまたイエス様を十字架につけた人々です。

さらに、ローマ帝国の兵士たちもまた、イエス様をばかにし、唾を吐きかけて侮辱した。彼らもまた、イエス様に苦しみを与え、十字架につけた人々であったと言えます。そのように、十字架につけたのは、ファリサイ派・律法学者たちであり、群衆であり、兵士たちであり、ピラトであった。

そして、その中に私もまた入っている。イエス様を苦しめ、また、十字架につけたのは、私たちであり、この私である。そのような罪人の代表として「ポンテオ・ピラト」という名前が記されていることを心に気が付くのです。

ですから、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられた」と告白する時、イエス様を苦しめ、また、十字架につけたのは、この私であるという思いが湧き起こり、私たちは自分の罪の深さを思い、激しく心が痛むのです。

しかし、他方、私たちは、『主は苦しみを受け、十字架につけられた』と告白する時、同時に、イエス様が十字架上で叫ばれた祈りの言葉、『父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは自分が何をしているのか知らないのです』という言葉の思い起こします。つまり、イエス様は、十字架上で、ご自分を十字架につけた、すべての者たちのために祈っておられる。すべての罪人のために祈っておられる。『父よ、彼らをおゆるし下さい』と祈っておられることを同時に知らされるのです。私たちは、ここで私たちの罪が赦され

たことを心に覚えるのです。

私たちがイエス様を十字架につけたのだけれど、そういう私たちをイエス様が十字架
上で赦しておられる。十字架と言うのは、私たちの罪を明らかにするものであるけれ
ど、同時に私たちの罪を赦す出来事であったことを心に覚えるのです。」